のあり道德は全く相對的なりと、この結論は何人も容易に下し得べきに似たれども、こゝにまた人心に深く根ざせる二大動機の存するありてしかく輕々しく此法論を許さいらんとす、其動機の一は道德に關する懸念なり、即ち道德の相對は道德の滅亡若くは望なき衰弱を意味すること、なるてふ懸念なり、若し眞に善と呼び惡と稱すべきものゝ世に存することなく善惡は唯人の考へ次第なりと云ふに至らば人は何を苦んで善を求め惡を避くるの要かある、宜しく飽まで喰ひ飽まで飲み飽まで樂んで以て生を終るべし、道德果して何の要あるかこれ即ち道德の久遠不變を否定するより起る當然の結論なり、道德の相對を拒絶せんとする第二の動機は道德の實行を奬勵保証する力を要求する願望より出づるものなり、論者云はく吾人は善の大なる擁護者を要す、若し此天地にして其一部は道德を助成し一部は道德を破壞するごとき覺束なきものならば吾人は如何にし安んじて道德を行ひ得べき吾人は善惡混淆天道是か非かの世界に安住するを得ず吾人は道德が實在の根底と深き關係を有することを知るまでは道德を行ふの勇氣を有せずと、かゝる人は宇宙が彼の味方をなすに非ざれば己が理想の爲めに戰ふことを欲せず所謂勝算なければ戰はず、切り札を有せざれば骨牌の遊戯に加はらずと云ふ人に似たり、思想界の冒險家なるゼームスすら此動機の力あるを自認したりしが如し、吾人は理想の爲めに奮鬪すと雖ども時としては疲勞倦怠に堪へざらんとすることあり、吾人の肉と血は間斷なき惡鬪の困苦を忍ぶ能はざる狀態に陷ることあるなり、かゝるときには、吾人は武器を投じて暫時の休息を得んことを欲して已まず、この時に當り吾人は一時武器を投ずるも敵に乘せらるゝ恐なきことを知らば如何許り心安かるべき、若し休息の己むを得ざる場合にも少なくとも戰爭は其爲めに停止されずして依然進行し最後の勝利は確實なりとの信念は如何なる慰籍ぞ、吾は弱くとも吾は休息すとも絶對の理想は吾が味方にして終局の勝利は我に歸すべく、吾ならざる正義の力が我の擁護者なれば吾は安んじて道德の休日を樂み得べし。

道德は絶對なりや將た相對なりや其意義の如何によりて然りとも否とも云ひ得べし、絶對者は存在するか、誰人も智識的に之を証明し得るものなかるべし、諺に絶對者なしと云ふものは非常の賢人か非常の愚人なりと、吾人の智識はかくの如き問題に對して確實なる答をなすには餘りに狹小なり、吾人の智識は狹小たりと雖ども活動は止むべきに非ず、知るも知らざるも活動せざるべからず活動せんが爲めには信念を要す即ち上述の如き動機に支配さるゝ所以なり、ゼームスは人に活動の爲めに信ぜんとする意志の必然に起り來るを說けり、然りと雖ども實際道德の絶對を信ずることが道德の理想を行ふことに欠くべからざることなるか、乞ふ吾人をして必ずしも其然らざる所以を述べしめよ。（未完）

雜錄

師恩に感ず

山月　川合信水

高大にして窮極を知らず、而も卑小にして日常を離れず、深遠にして際涯を見ず、而も淺近にして手中を去らず聖の聖に入り、俗の俗に沒し、玄の玄、平の平幽の幽、顯の顯、寂にして靜、活にして動、至善にして審判あり、大悲にして救濟あり、軟にして硬、弱にして强、光明宇宙に輝き、美眞、乾坤に滿つ、法を離れて而も法有り、美を脫して而も義存す東西あり、南北あり、而して無方自在、矛盾あり、撞着あり、而して圓融無礙、之れを執れば則ち其の大を失ひ、之を放てば則ち其の妙を得、之れを說くに言かく、之れを寫すに筆なし、之れを得て而して始めて我が神の絶大を識るべく、之れを識りて而して始めて我が基督の秘奧を觀ずべきなり。

明治二十三年八月、吾受洗して基督教會に入り、以て信行一致の人たらんことを期す、二十六年二月、仙臺東北學院に入り押川方義先生の大精神に觸れ、始めて此の不可言の妙境あることを知り、苦修熱禱、十數年を經過し、天恩に浴して罪障を離れ、束縛を脫し、儀式の範圍を出で所謂靈感の域を越え、更に大なる天光に導かれて、此の妙境に一步を轉入し以て聖賢大信の一端を味ひ。日々之れを活用し、專行して自他不盡の快樂を享くるに至れり。

嗚呼吾、若し押川先生に逢はず、逢ふも、先生胸奧の妙道を識ると能はざりしならば、恐らくは、教理、儀式の奴隸となり、些少の靈的經驗に滿足し、紳士道德の範圍を往來して、以て此の一生を終るに至りしならん、之れを思ひ、之れを考ふれば、吾は神恩の無限なるに感泣すると共に、師恩の洪大なるに感謝せざるを得ざるなり。

所感

東京澁谷　酒井勝軍

永らく貧と病に惱まされて漸く九死に一生を拾うた極めて貧弱な一少年が、押川先生より三圓の旅費を惠まれて偉い勢ひで仙臺神學校の寄宿舍に着いたのは、忘れもせぬ明治二十三年の九月十八日であつた。そしてアノ親切な金成舍監の室に收容されたのであつたが、唯でさい無愛想な仙臺辯、而も金成君の破鍋のやうなアノ調子で、實は慰めてくれられたのであつたが、非常に怒鳴られたやうな氣がして熊の前の兎のやうに縮まつて居つたのが即ち吾輩であつた。それが、こは東京の同窓生の最故參である。性來人の眞似が大嫌ひなので、曾つて何人も試みたことのない又企てたことのない事業をするために努力してゐるが、最近の感想は何であるかと問はゞ。

第一、日本帝國はイスラエル王國の移建されたるものなる事

第二、我皇統は天裔なるが故に天皇の神聖は侵すべからざる事

第三、我國民は同時に神の選民なる事

第四、天照大神は我等の信ずる神エホバと同一なる事

第五、大和魂は即ちクリスチャン、スピリットある事

等であるが、學者でないから歷史上の立證は出來ぬ。併し何の理由なしに此信仰が與へられたのである、自分は之を神の默示と思うて居る、故に最近の吾輩は神エホバに絶對の服從をなし居る如くに、天皇に對して絶對の服從をなすものである。

十二月六日拂曉二重橋側にて鳳輦を奉送した時に、實に不思議なる靈容を仰き感極まつて思はず「陛下のためには何時にても死にます」と心に誓つた、左右貴衆兩院議員諸氏相顧みて曰く「拜みたくなつた」と

我信仰日本化せるに非ず、高く雲を排し生命の水の源に到達したる時、我國家及皇室に對する我信念自つから左の如くに見え來れるのみ。

此感想に據り吾輩は誠心誠意御大典を奉祝すべく、「讃美之友」の特別號（忠君愛國號）を發行したのであるが、同窓生諸君の中所望の方は往復ハガキで御申越あれば直ちに御送り致します、宛名は東京澁谷酒井勝軍。

山形縣の山間より

阿曾沼生

一、私の卒業した頃は（明治三十年）英語